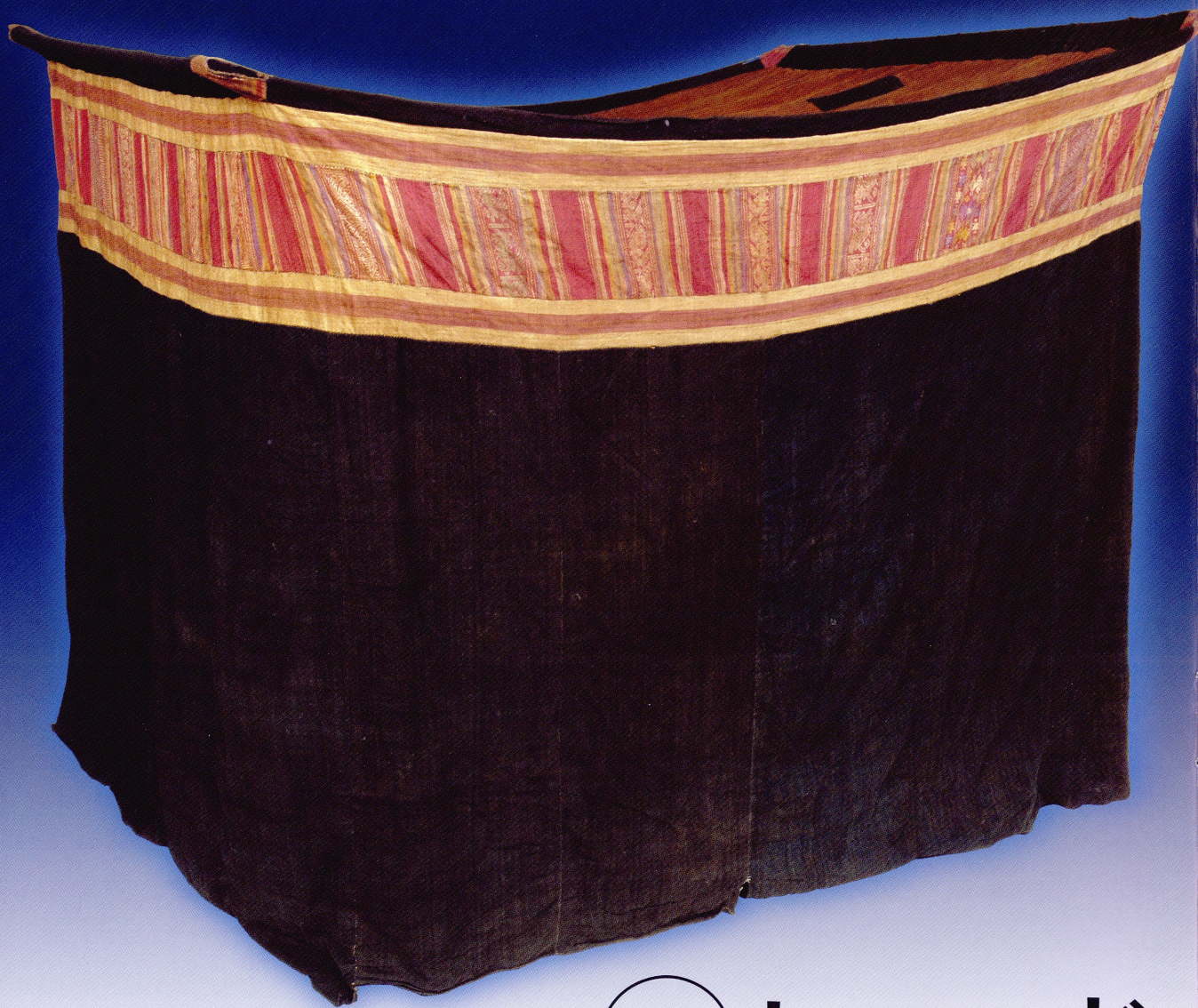
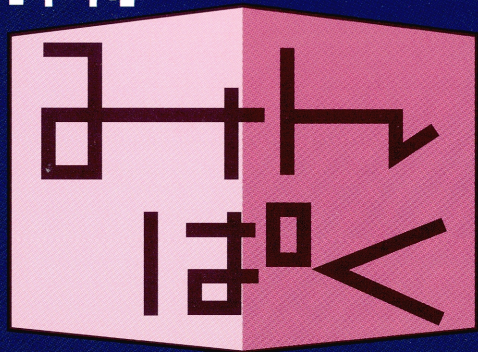


月刊

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283  
平成20年7月1日発行 第32巻第7号通巻第370号

国立民族学博物館  
2008

7



特集 レコード

# 東洋の星物語

渡部 潤一

わたなべ じゅんいち / 1960年福島県生まれ。天文学者。東京大学を経て、現在、自然科学研究機構国立天文台および総合研究大学院大学准教授、広報室長。理学博士。研究の傍ら、講演、執筆、メディア出演などで活躍。『新しい太陽系』（新潮社）、『太陽系の果てを探る』（東大出版）、『星の地図館』（小学館）など著書多数。

天文学者というと、数学と物理学の世界に浸る、完全な理系人間と思われるが、なかにはわたしのような変わり者もいる。少年時代は、近くの畑で石器や土器を掘るのに夢中だったし、今でもキトラ古墳の壁画が公開されるなどと聞けば、休みを取って駆けつける、いってみれば考古学ファンに属する。大学の教養時代の選択科目で「民族学」のゼミをとったなどという天文学者は、希少種のはずである。もちろん現在では、宇宙にうかがふ天体の正体を探るのが仕事であるから、理系的な手法・見方で真実に迫っているのはいうまでもない。しかし、その一方で、宇宙観の変遷や世界中のさまざまな民族が星をどのように眺めてきたのか、ということにも、研究とまではいかないものの、今まで興味をもち続けている。

プラネタリウムなどにいくと、よく聞かされるのがギリシア神話である。もともとメソポタミアあたりを起源とする星座物語が、ギリシアを経て現代に語り継がれているものだ。星座そのものに西洋星座を使うことが二〇世紀の初めに決まってしまったので、西洋文化に基づく星座物語が流布しているのは致し方ないことだろう。

だが、文明は多様であり、他の文化にも独特の星

の見方があり、独自の星座がつけられていた。そしてユニークな星の物語が紡がれ、語り継がれてきたのである。キトラ古墳の天井に描かれた星座は中国起源の星座だし、七夕伝説や中秋の名月なども東洋独自の伝承だ。日本でも中国星座を用いつつも、各地方独自の星座や星の名前が使われ、豊かな伝承が残されていたことが野尻抱影らの先人によつて明らかにされている。たとえば、冬に見えるオリオン座の三つ星をばさんで輝く白色の一等星リゲルと赤色の一等星ベテルギウス。このふたつを源氏と平家の旗の色に見立て、源氏星・平家星とよんでいたのは美濃地方であった。そんな民間伝承を、今でも拾い歩いている在野の研究者がいるのは心強い。

月刊  
目次  
JULY 2008  
月刊みんぱく 7

01 エッセイ 世界へ世界から  
東洋の星物語  
渡部 潤一

## 02 特集 レコード

レコードが発展させた  
音楽文化

福岡 正太

円筒と円盤の攻防

坂野 博之

レコードになった「映画説明」

今田 健太郎

08 モノ・グラフィ  
穴があくほどものを見る  
上羽 陽子

10 地球ミュージアム紀行  
取ってつけたような…  
ーシドニーのミュージアムから  
川口 幸也

11 表紙モノ語り  
黒タイの蚊帳  
櫻永 真佐夫

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々  
サトウキビ産業のたそがれ  
丹羽 典生

15 時論・新論・理想論  
残存デンプン研究のススメ  
渋谷 綾子

16 外国人として生きる  
「ハーフ」であることに誇りをもつ、  
100年に一人の「ミス・ブラジル日本」  
アンジェロ・イシ

18 歳時世相篇  
④雨安居  
ラオスの若者が出家する理由  
平井 京之介

20 生きもの博物誌  
博物館の  
いたずら虫たち①  
園田 直子

22 フィールドで考える  
本音の在りか  
鈴木 紀

24 みんぱく ウィークエンド・サロン  
研究者と話そう  
次月号予告・編集後記

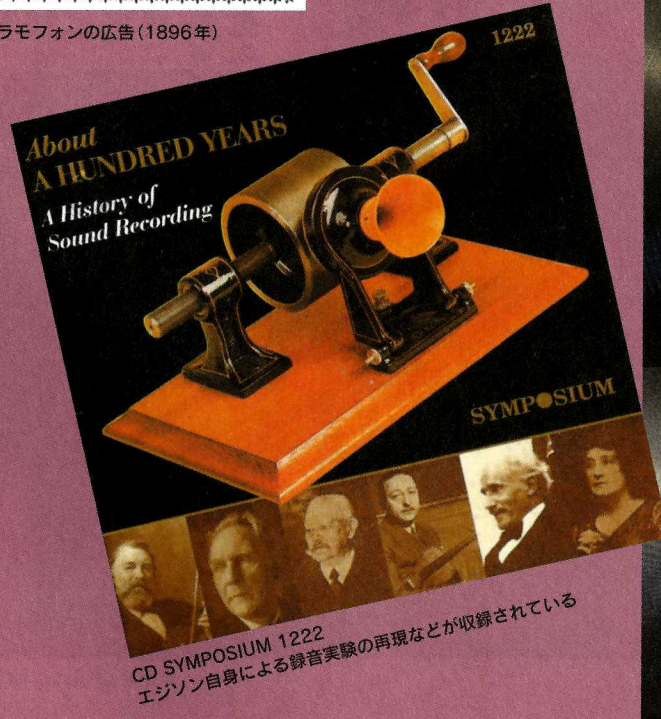
特集

# レコード

レコードは、エジソンとベルリナーの発明以来、技術開発と素材発掘の競争のなかで、おおくの魅力あるジャンルを世に送り出してきた。録音された音を聴くという習慣を身につけた日本人は、「映画説明」をレコードで聴くという不思議なジャンルも生み出した。二〇世紀の音楽文化の原動力となったレコードの歩みを振り返ってみたい。



グラモフォンの広告(1896年)



CD SYMPOSIUM 1222 エジソン自身による録音実験の再現などが収録されている



## レコードが発展させた音楽文化

福岡 正太  
(ふくおか しょうた)

本館文化資源研究センター

### レコード発明の意味

レコードは、一九八〇年代にはほぼCDにとどまっていた。今では触れたこともない人が増えている。しかし、ある世代から上の人びとにとって、レコードは音楽そのものだった。音楽を好きだということ、あるいは特定の歌手や音楽家のファンだということは、レコードをもってあることと同義だった。多くの人がレコードを買い、レコードをとおして音楽を聴くことで、そこに録音された音楽を Exhibiting 展させてきた。

二〇世紀前半、録音再生技術の発展とレコードの普及は、音楽のあり方を大きく変えた。音楽は、レコードという商品として流通するようになり、少数のパトロンや特定の共同体に属する人びとに支

えられてきた音楽は、レコードを買う不特定多数の人びとのために演奏され録音されるようになった。人びとは、自分のものとなったレコードにより、何回も繰り返し同じ演奏を聴いた。同時に、次々と違う新しい音楽を自分のものとしたくなった。このようにして、新しい音楽が次々と生み出され、伝統的な音楽も大きく変化した。

### 外地録音と東アジアの音楽文化

東アジアでは、各地を支配下におさめた日本のレコード会社が、音楽産業と音楽の展開に大きな影響をおよぼした。日本の大手レコード会社だった日本コロムビア株式会社の場合、ソウル、台北、上海、ハルビン等に支社や子会社をかまえ、現地社会に向けてレコードを作り流通させた。これらのプレスは、本社川崎工場でおこなったため、レコード原盤が日本に残され、現在、民博に所蔵されている。そこには、民俗的な音楽、古典的な音楽、西洋芸術音楽、流行音楽など、幅広い音楽が録音され、当時の音楽文化研究の重要な資料となっている。

不思議なことに、わたしたちが「外地録音」と名付けたこれらの資料は、日本のレコード会社の歩みのなかでほとんど振り

返られることがなかった。本社の人間は、中身にかかわっていないため忘れたのだらうか。だとすれば、レコードプレス自体は本社に頼んだものの、外地録音は、ある程度、自律的に制作されていたことを想像させる。政治経済的には、一方的な支配を受けながら、音楽的には、ある程度の自律性をもって自分たちの表現を発展させてきたのだらうか。

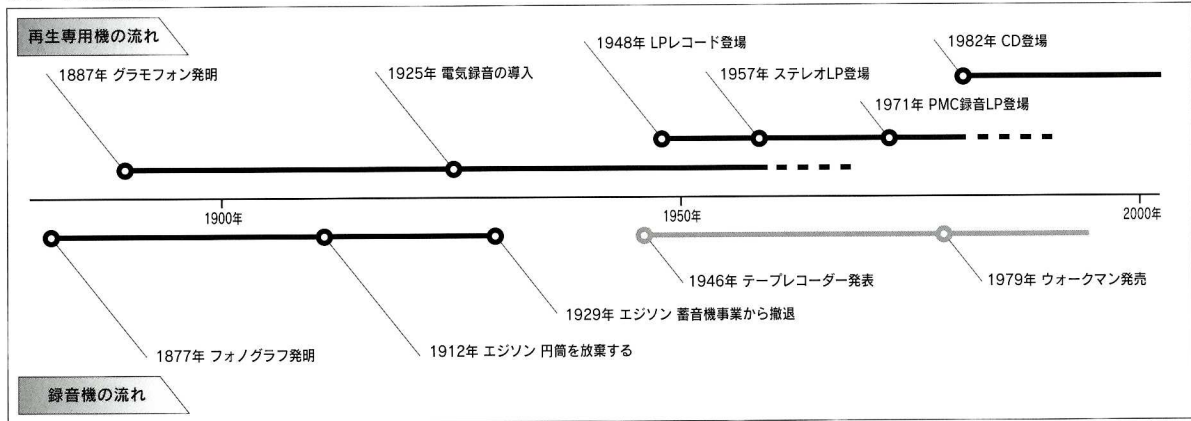
一方で、よく資料を見ると、特に流行音楽の作曲や編曲、伴奏などに、しばしば日本人の音楽家がかかわっていたことがわかる。欧米の流行を取り入れた音楽

については、まだ各地に専門家が少なかったのだらう。その点において、東アジアの音楽家たちは、そうとはあまり意識せずに、交流しながらその技を磨いていったのかもしれない。

インターネットから音楽をダウンロードすることが当たり前になりつつある今日、レコードは忘れ去られようとしている。しかし、レコードとともにわたしたちがどのように音楽文化を発展させてきたのかを振り返ってみることは、今後の音楽文化を展望するうえでも必要なことではないだろうか。



民博が所蔵するレコード原盤。日本の統治下におかれた中国、台湾、朝鮮に向けて作られた



# 円筒と円盤の攻防

坂野 博之  
(さかの ひろゆき)  
音楽学者

## 誕生と競合

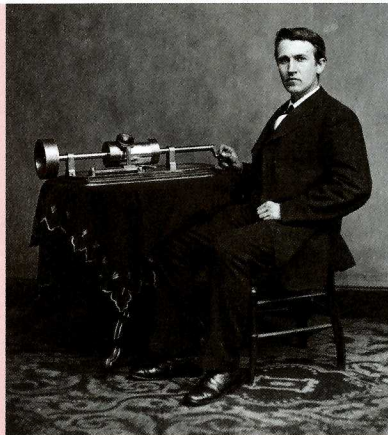
一八七七年のクリスマス・イヴに、ある装置の特許がアメリカで申請された。フォノグラフと命名されたこの装置は、スズ箔を巻き付けた円筒を手でまわし、そこに針で音溝を刻みつけて音声（おとごゑ）を記録することができた。開発者は『発明王』エジソンである。蓄音機とレコードがこうして誕生した。

その後フォノグラフは改良され、記録媒体に硬質蠟を用いた改良型フォノグラフが一八八八年に完成する。これがいわゆる口ウ管式蓄音機とよばれるものである。

ところが、レコードの誕生にはもうひとつの別な系譜があった。フォノグラフが改良されていた最中、同じアメリカでベルリナーが一八八七年に「グラモフォン」を考案した。フォノグラフの発明からちょうど一〇年後のことである。

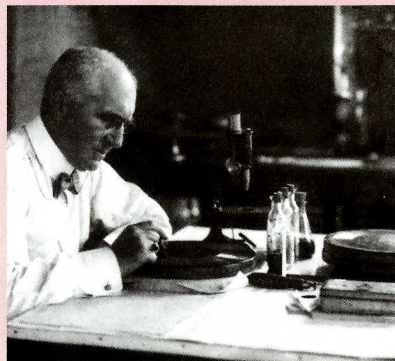
## 縦と横

フォノグラフとグラモフォンとはその録音方式が異なっていた。記録媒体に対して、フォノグラフ方式は音溝を垂直方向に刻み（縦振動）、グラモフォン方式



エジソンとフォノグラフ(1878年4月)

研究所におけるベルリナー(1920年代)



マルチホーンによるパデレフスキの録音(1911年 右奥ガイズバーク)



コルカタにおけるゴオハル・ジャンの録音風景



複数台のフォノグラフによる繰り返し録音

最初期の平円盤用の録音システム

は音溝を水平方向に刻んだ（横振動）。つまり再生時に、フォノグラフの針は上下し、グラモフォンの針は左右に動いた。しかし両者の決定的な違いは、そのレコードのかたちである。フォノグラフ用のレコードは円筒型で、長さが四インチあり二分間再生できた。一方、グラモフォン用のレコードは平円盤で、最初期は直径が五インチ（一二・七センチメートル）

## 録音と複製

商品として録音された最初の円筒は一八八九年にノース・アメリカン・フォノグラフ社から発売された。一方、グラモフォンとそのレコードはドイツの玩具会社ケンメラー＆ラインハルト社から一八九〇年に販売された。

当時の録音はマイクロフォンを用いなかった。録音の過程で電氣的な増幅は一切なく、空気の振動をそのまま音溝に刻んだ。そのため録音スタジオにはマイクロフォンの代わりに大きな集音ホーン（ラッパ）が設置されていた。そのホーンの末端には振動板と針が取り付けられ、空気の振動を受けて針が動き、記録媒体を削り取って音溝を刻んだ。演奏者は録音の際、この集音ホーンに向かって音を吹き込んだことから、現在でも録音することを「吹込み」とよぶ。

円盤の場合、録音された原盤から型を

そろった録音カタログは円盤の人気をさらに高めたのである。

## 攻防の終焉とその後

二〇世紀に入り両面盤のレコードが発売されると、円盤と円筒の人気の差は急速に広がった。これに対抗して、録音機能を省いてフォノグラフをプレイヤーズ化し、円筒の大量複製を実現したが、結局エジソンは一九二二年に円筒を放棄して縦振動方式の円盤制作へと転換する。しかしそのエジソンも一九二九年、ついに蓄音機事業から撤退し、一九世紀末からおよそ四〇年も続いた録音方式の競合はここに幕を閉じる。

## タイトルの充実

取り、それをもとにしてプレスすれば、一回の録音で効率よく大量に複製が作れた。ところが円筒は容易に型が取れないため、複数の円筒を作るには同じ演奏を繰り返し何度か録音する必要があった。

ベルリナーは自ら一八九五年にベルリナー・グラモフォン社を設立して本格的な事業展開をおこなった。エジソンも一八九六年にナショナル・フォノグラフ社を設立し、さらにヨーロップへと進出した。

ベルリナーも少し遅れてヨーロップへと進出する。そのヨーロップ本社とも言うべき英グラモフォン社（現在のEM

）は、録音プロデューサーのガイズバークが中心となり、まずヨーロップでシヤリアピンやカルーソといった大物歌手の録音をおこなった。

続いてガイズバーク一行はアジアへの長期出張録音をおこなう。コルカタ（カルカッタ）、シンガポール、香港、上海を経て、一九〇三年に来日する。そして落語家の快楽亭ブラックを仲介者にして、二七三分のレコード録音をおこなった。これらの録音は一枚組のCD『全集日本吹き込み事始』として復刻されている。このCD一枚という枚数はベーターヴェンの交響曲全集が二組も作れる分量である。

こうして、魅力的なタイトルが豊富に

現場では一九二五年からマイクロフォンを用いた電気録音技術が導入される。それまで歌手や器楽の演奏が中心だったジャンルに管弦楽のレパートリーが数多く加わり、レコードの新時代への幕が開いていった。

# レコード

特集

# レコードになった「映画説明」

今田 健太郎  
(いまだ けんたろう)

京都市立芸術大学特別研究員

## 実演をもとに

日本におけるレコードの歴史をながめてみると、「映画説明」という不思議な名前のジャンルを目にする。現在であれば、映画というものは映像と音声を含めた複製技術であり、そのまま楽しむのが普通である。その内容を抜き出して語るといふ行為が録音に値するとは考えにくいだろう。しかし、レコードという音声の複製技術とそれと向き合った芸能の関係を考えよとすると、きわめて重要な示唆を与えてくれる。

映画説明とはもともと実演するパフォーマーであった。映画には、現在のそのような録音された音声をとまなうトーカー(発声)になる以前に、音声を実演で補う無声映画の時代があった。日本にお

いては、こうした、映像にしたがってその内容を解説したり、声真似をしてせりふを入れたりする実演を「映画説明」あるいは「声色」といい、それをおこなう芸能者を「活動写真弁士(略して弁士あるいはカツベン)」「映画解説者」とよんだ。一九〇〇年代から一九三〇年代にかけて、無声映画は日本全国において急速に普及する。映画館は各地の芝居小屋にとつてかわり、映画説明の弁士たちは落語や浪花節の語り手をおしのけて大衆娯楽の花形となった。映画説明の実演そのものも、人気のあつた浪花節や流行歌などとともに、当時普及しつつあつたレコードに、多数吹き込まれることになるのである。

## 型のないパフォーマンス

ところで映画説明は、実演するパフォーマンスとはいえ、従来の芸能とはまったく異なるところがある。それは、決まったかたちや演目をもっていないということだ。従来の芸能は、それぞれのジャンルごとに独特のパフォーマンスのかたちが確立されているため、それを見たり聞いたりすることでその芸能を特定できる。たとえば、落語には落語に特徴的な身体動作、音声、演目、舞台演出があるし、講談にしても浪花節にしても然りである。それに対して、映画説明とい

うパフォーマンスは、極端にいえば、映画を上映にしたがつて説明する語りであれば、何をやっても映画説明となるのである。



▲花井秀雄(大勝館) お酒のあとではきつ踊りが出る。シメミツとした清元にあはせて、あの長い手と足で踊るところは、まことに結構で、思ふも、平聲くとのこと。一番好きな者は天鼓で、お辨當は天鼓の大家(大勝館)を一目も嫌ったことがない。

▲染井三郎(帝國館) 踊はなんでも上手、あまりお酒はいけませんが、酔つて少し心持ちがよくならず、口三味で必ず踊る。時々花の扇子をふっことある時。一番好きなものは、うさぎで、いつもうさぎの香りのよいこと。

▲西村英天(天鼓座) 酒が第一の好物。病氣のあとだから今は餘程つ、しんで居るのだが、それでも時々

▲加藤貞利(大に座) 貞利の癖は、酒は清元がよいこと。大きな聲で、眼をふつて歌ひ出すところは、大勝館だ。お嬢さんが一番好き、よくに勝の辯士室には有平勝の絶えたこと。

▲林天風(帝國館) 流行節をやるのが一番上手。流行節を知つて居るのは、辯士界、等しい。洋食が好き、ことにカツレツと茶は切つてこた。

▲石井善波(キネマ) あの聲で、しかも清元をやるのだから驚く、これも藝者おひの賜か知らず、酒がすき、酒の中でも洋酒、洋酒の中でもビールが一番と



▲浦井英光(帝國館) 踊はなんでも上手、お酒はよく飲む。お嬢さんが一番好き、よくに勝の辯士室には有平勝の絶えたこと。

▲島田漢月(東京俱樂部) 常勝津が一番上手だ。家に歸つてからは妻の口三味で、語り出す、踊り始める。側から見ると居る人は、その姿がなごに驚くといふこと。好きな者一卵の厚焼。

▲河邊紫水(新報館) 踊ること天下一品だ。長くは細い、水色の着物が踊るのだから、その形も面白。下手でも上手に見えるが、ほんとに上手だといふ。好きなのは、第一は、鹽煎餅。

(写真1)『活動之世界』第5号(大正5年5月)より

## トーカーさえも映画説明!?

さて、本題に戻ろう。この、いわば「なんでもあり」の映画説明がレコードに吹き込まれ、それが後世にまで残ると何がこのころのどう?この実演が存在していた時代には、映画説明レコードは、他の語り芸や演劇とは区別された、ひとつのジャンルとして認識されていたことおそらく間違いない。レコードのラベルもそのように記されているし、レコードに吹き込んだのは有名弁士たちであり、演目も映画のタイトルをそのままもっている。当時の人びとなら、映画説明という実演をもとにした録音であることとをたやすく想像できたろう。



(写真2)映画説明「船頭可愛いや(一)」弁士 泉詩郎

しかし、すでに述べたように、映画説明は確固としたパフォーマンスのかたちをもたない。それゆえか、映画説明レコードの録音は、実演の実態から離れてしまい、現在でいえばラジオドラマや歌謡ショーの司会者による前説のような、音声で完結するまとまった語りを志向するようになる。そのような工夫は、すでに無声映画の時代にはじまっていたが、映画のトーカー化によって弁士という生業がなりたたなくなり、さらに拍車がかかったようだ。つまり、実演としての映画説明という背景が失われたため、録音のみで完結せざるをえなくなったのである。

そうした映画説明レコードで代表的なのは、泉詩郎という弁士である。彼はトーカー化の後でも人気を保つた数少ない弁士であるが、驚くべきことにトーカー映画の映画説明レコード(一)を多数残している。写真を見てほしい(写真2)。このラベルには「松竹蒲田オールトーカー」とあるとおり、この映画説明がすでに無声映画のものではないことがわかる。「船頭可愛いや」はもともと流行歌であり、この映画はそれを主題歌として劇中に登場させるべく製作された。だが、それをもとにしたこのレコードの売りは、映画の梗概や主題歌もさることながら、泉詩郎という弁士の話芸であることが、このラベルから見てとれるだろう。

このため、物売りの口上や政治家の演説から、講談調、新劇調、歌舞伎の役者の声真似、浪花節よろしくフシをばさんだりといったものまで、さまざま



(写真1) タテ48cm×ヨコ37cmの袋

(写真2) 男性の underwear。ボーダー部分に縞模様が織り込まれている



# モノ グラフィ

## 穴があくほど ものを見る

上羽 陽子(うえば ようこ)

本館文化資源研究センター



(写真3) 袋の拡大。異なった木綿布で継ぎ接ぎが施されている

ここに一枚の袋がある。これは、インド西部のグジャラート州アフマダーバードの骨董品屋で購入した袋である(写真1)。これを購入した五年前、店主からの説明はグジャラート州西部のカッチ県に住むラバーリーの女性が、婚礼用の衣装や道具を入れて運ぶ袋「コトリー」との説明を受けた。フムフムなるほどと、納得をしながら何年間は我が家のタンスで眠っていた。

先日、久しぶりにこの袋を手取る機会があり、以前、説明を受けた婚礼用袋という目線でこの袋を見ると、何か不自然なことに気がついた。通常、ラバーリーの人びとは婚礼用に使用するには、使い古した布を使用することはめったに

なく、新しい布を用いて制作をする。じっくりこの袋を見てみると、袋の上半分に用いられている布は、着古した男性の underwear を使用している。男性の underwear に用いられる木綿布にはボーダー部分に縞模様が織り込まれており、この袋の中央のタテ縞は、まさに underwear のボーダー部分を再利用して作られたことがよくわかる(写真2)。

また、この袋を裏返してみると、使われている underwear の布には、何度も何度も、継ぎ接ぎをした部分がある。きつと、一枚の布を大切に使うために、穴があいたら繕い、そしてまた穴があいたら繕うということが繰り返され、少しずつ異なった木綿布が何枚にも合わさっているの

たことを確認するために、この袋を片手にカッチ県を訪れた。カッチ県で生活をするラバーリーはラクダやヒツジ、ヤギなどの牧畜をおこなう人びとや、牧畜生活から離れてサービス業やトラックの運転手、アラブ諸国への出稼ぎなどで生計を立てている人もいる。牧畜生活から離れている人びとに、この袋のことを尋ねると、「婚礼用の袋」という返答がやはり多かった。

しかし、牧畜生活をしている人たちは、これは「ガラヌコトリーだ!」と口をそろえて答えた。この袋は、放牧中の晩に子ヒツジやヤギが逃げないようにつけておく首輪・ガラヌを入れるための専門の袋であるという(写真4)。予想どお

きつと、この袋は婚礼用ではない。こんな、当たり前のことに何故、長いあいだ気がつかなかったのでしょうか? わたしは一九九七年からカッチ県のラバーリーを調査対象として、彼らの刺繍布は見慣れてきたはずである。骨董品屋の店主があまりにも饒舌であったことを差し引いても、わたしは彼らのものを見慣れすぎていて、ものをそのまま素直に見ることができていなかったのではないか。

である(写真3)。さらに、袋には泥のような汚れもついており、明らかに儀礼でしか使われていない他の婚礼用袋とは異なっている。

リ、この袋は婚礼用ではなく、放牧用の袋であった。だが、同じような放牧用袋がたくさんあるなかで何故、この袋が首輪入れ専門の袋とわかるのであろうか。首を傾げているわたしを見て、彼らはタテヨコの袋の比率と使われている布の種類、施されている刺繍でわかる、そして、それをおまえが判断するにはもつともつとたくさんものを見なければダメだという。

現在の牧畜生活で使われている同様の袋は、わずかな刺子のみの簡素なものとなっている(写真5)。改めて、この袋を見てみると、首輪を入れる袋にここまで細かい刺繍を丁寧に施した人の手の動きまでを想像することはできても、彼らの言う微妙な差異を理解することはできなかった。

当然、ものを見るにはそのものが作られた社会や文化への理解が必要となる。しかし、ときには先入観をもたずに、素直なものに出合っ、素直に感じ取ること

も大切なことである。ものときちんと向き合っ、ものが語っていることを聞き取る。そして、もの全体を見てから細部を見る、そしてまた全体を見る。この一見、当たり前で愚鈍のような行為を繰り返すことによっ、あらたな発見がある。昨年、民博にインド西部の刺繍布約三五〇点があらたに収蔵品として加えられた。これらの刺繍布を穴があくほど見てみたい。



(写真4) 子ヒツジに首輪をかけるラバーリーの男性

(写真5) 現在使われている放牧用袋。使い古された布を巧みに再利用して作られている



## 取ってつけたような… —シドニーのミュージアムから

川口 幸也 (かわぐち ゆきや)

本館文化資源研究センター



パワーハウス博物館/  
オーストラリア

二〇〇八年一月末、わたしは真夏のシドニーを訪ねた。ミュージアムの展示が、どのような狙いに基づいてなされているかを調査するためである。

おもだつたミュージアムを一通り見終わつたあとで、わたしはチャイナ・タウンにほど近いパワーハウス博物館に足を運んでみた。こは、その名のとおりに、もとは市内を走るトラム・カーの発電所だつた建物を改装し、サイエンスとデザインの博物館として一九八八年にオープンした。

展示は主として、一八世紀後半から現在までの、家具や衣装、陶磁器、装飾品などデザイン史と、機関車から自動車、飛行機、はては宇宙探査、原子力発電に至る科学技術の歴史で構成されている。一見して、幼稚園児から小中学生ぐらいまでを意識していることが見て取れる。

庄巻は、一八世紀後半、産業革命の原動力となつたワットの蒸気機関の再現展示である。高さ約二、三メートル、しかもそれは実際に動く。そのちょうど前あたりに、一八世紀から一九世紀にかけてのイギリスの衣装と陶磁器のコーナーが並び、ウエッジウッドなどの食器類や、フロックコートに身を包んだ紳士とドレスを着た淑女が展示されている。世界に先駆けて産業革命を成し遂げ、一九世紀ヴィクトリア朝の繁栄を築いた大英帝国の栄光の歴史を、そのまま我われは引き継いでいる：そんなメッセージが、一帯の展示からは伝わってくる。でも、その我われとは誰のことだ、と思わず半畳を入れたくなるが、ここではそのことではなく、別の点を話題にしたい。

一八、一九世紀のイギリスは、たしかに世界に進出し、繁栄を謳歌した。しかし、底辺の人びと、とくに婦女子の生活は惨状を極めていたはずだ。そんなことを眩きながら、蒸気機関の壁の背後にある階段を一番上の四階まで上がつていくと、壁と壁に挟まれた狭い空間の一番端に

物館、美術館の展示をわたしは思い返していた。そういえば、どこへいっても必ずアポリジナルをあつかつた展示があつたが、そのなかには、前後の脈絡にあまりなじんでいないように見えるものもあつた。つまりは、取つてつけたような、不自然な感じを受けたのである。

たつた一回、それも数日間だけだつてさう言い切るのはいかにも乱暴に過ぎるけれども、さまざまな歴史観や主張を含み得るテーマについて、過不足なく、かつ、あるストーリーのなかに位置つけて展示することの難しさを、あらためて感じたことである。

ひっそりと一八世紀における底辺の暮らしと題する小展示があつた。画家ホガースの有名な銅版画「ジン横町」や「闘鶏場」の写真パネルが貼られており、「この時代、人びとは酒とどんちゃん騒ぎに明け暮れていた」という解説も付けられている。一応は史実を踏まえているという苦心の展示であろう。もちろん、「不都合な真実」にも目を配りをしていられるのは、それなりに良心的といえはいい。ただ、どこか取つてつけたような印象が否めない。それにたぶん、この場所では誰の目にも触れないだろう。帰る道すがら、シドニーでそれまでに見たすべての博

ワットの蒸気機関の再現展示

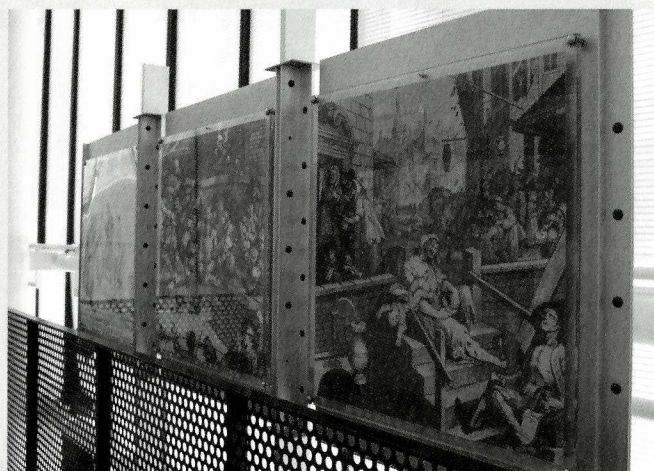


パワーハウス博物館



フロックコートの紳士とロングドレスの婦人

ウィリアム・ホガースの版画パネル



## 黒タイの蚊帳

蚊帳(標本番号H179219、高さ/162cm 幅/204cm 奥行/160cm)

■  
檜永 真佐夫(かしなが まさお)本館民族社会研究部  
■

藍で黒く染め抜いた胴部の上に、鮮やかな絹の縁飾りが付いている。織り柄から察するに、黒タイの蚊帳だろう。黒タイはベトナムとラオスの国境地域に住む盆地民である。

沢の水は、豊かな米の生産を約束するが、マラリア蚊をも発生させる。蚊帳の使用は予防に有効で、東南アジアでは、伝統的な蚊帳使用地域とマラリア地域はかなり合致しているようである。

日本では涼しげな薄い色の蚊帳が好まれた。中国やベトナムでも白が多い。しかし黒タイのものは総じて黒い。白を喪服の色として忌むのがひとつの理由である。くわえて、間仕切りのない家で、蚊帳の中が唯一のプライベート空間だからだろうか。

蚊帳は、なかで寝る人の行動をも物語る。蚊帳が開かれているのは、すでにふだん通り



の活動が始まっているからである。しかし昼寝や着替えの際には、なかに戻ってくる。こ

の開閉運動が、昼と夜を演出し、外からの視線をコントロールしているのである。

蚊帳はめったに取り外されることがない。なかで寝ていた人が死んだことを意味するからである。故人があのだ世に行っても安眠できるように祈って、墓所に建てる御霊屋に蚊帳を入れることもある。

近年、村では、巧みな意匠のものが減った。身の回りの衣料品を女性たちが手作りするような習慣が廃れてきたからである。かわって、ナイロン製の白い蚊帳が普及しつつある。一方で、北タイ、チェンマイのナイトバザールでは、手の込んだ縁飾りの古布が高額で取引されている。これが市場経済というものだろう。しかし筆者は、その綾錦を夜ごとに天蓋てんがいとしていた人の魂の平安を、ひそかに念じる。葬礼が終わり、蚊帳が外された寝所の空虚さを思い出すからである。



企画展

「ラテンアメリカを踏査するー写真で辿る黎明期の考古学・民族学調査」

会期 九月三日(火)まで  
場所 常設展示場内

「いろんな『おかね』で世界がみえる」

会期 九月三〇日(火)まで  
場所 常設展示場内

■博学連携教員研修

ワークショップ「二〇〇八 in みんなく

民博を活用した実践事例の紹介やワークショップをとおして、国際理解教育における博学連携の意義や可能性について考えます。内容の詳細はホームページをご覧ください。

日時 八月五日(火)  
会場 セミナー室、および常設展示場  
参加費 無料  
参加申し込み方法 所属・参加者名・参加

希望ワークショップを明記のうえ、左記までお申し込みください。(当日参加も可能ですが、事前申し込みにご協力ください)

ファックス 〇六六八七八一七五二三  
E-mail: hakugaku@idc.minpaku.ac.jp  
お問い合わせ 情報企画係

電話 〇六六八七六一二二五一  
(平日九時～一七時)

■人間の文化研究総合推進事業シンポジウム「博物館と大学ー知の装置の連携と協働」

我が国で博物館と大学が連携や協働を進めていくうえでの現状と課題を、博物館や大学の研究スタッフが報告し、今後の可能性について検討します。

日時 七月十九日(土)  
場所 第四セミナー室(定員三〇名)  
聴講自由 申し込み不要、当日先着順  
お問い合わせ 文化資源研究センター事務局  
電話 〇六六八七六一二二五一

刊行物紹介

塚田誠之 編 『民族表象のポリティクスー中国南部における人類学・歴史学的研究』 風響社 定価:5,250円(税込)



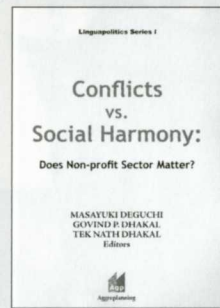
文字、人物、施設、エスニック・シンボルなど多様な表象形態が、民族文化を生産し、流通・消費させる磁場となっていることを明示するとともに、その政治性と表象主体のせめぎあいのなかに、民族文化とその変容のダイナミクスを読み解く斬新な論集である。

中牧弘允、佐々木雅幸、NIRA(総合研究開発機構) 編 『価値を創る都市へー文化戦略と創造都市』 NTT出版 定価:3,150円(税込)



文化の創造性という観点から従来の都市・地域政策をとらえなおし、それぞれの地域がその独自性を活かしながら「価値を創る都市」へと向かうための具体的・実践的提言をおこなっている。

MASAYUKI DEGUCHI GOVIND P. DHAKAL TEK NATH DHAKAL (eds.) 『Conflicts vs. Social Harmony: Does Non-profit Sector Matter?』 Aggreplanning 定価:12,000円(税込)



本書は当館の外国人研究員とともに、世界の研究者の協力で作り上げたもの。NPOセクターが、世界の軋轢と調和のなかで果たしている役割を分析している。この出版自体が「言語が人を分ける」という「言政学理論」に基づく。

Yasuhiko Nagano, Samten G. Karmay (eds.) 『A Lexicon of Zhangzhung and Bonpo Terms』 (国立民族学博物館調査報告 No.76)

Shinji Yamashita, Makito Minami David W. Haines, Jerry S. Eades (eds.) 『Transnational Migration in East Asia: Japan in a comparative Focus』 (国立民族学博物館調査報告 No.77)

『国立民族学博物館研究報告』 2008-32巻4号

『民博通信』2008 No.120 特集 伝統芸能を映像で記録する 責任編集 福岡正太

みんなくゼミナール

場所 国立民族学博物館 講堂  
時間 13:30~15:00(13:00開場)  
定員 450名(当日先着順)  
参加 無料  
展示場をご覧になる方は、観覧料が必要です。

○第362回 7月19日(土) 「映画でふり返る『民主化』前の韓国」

講師 太田心平(先端人類科学研究部助教) 劇的に変化する韓国社会では、こんにち「民主化」以前の暮らしにむしろ郷愁を覚えるという人も少なくありません。日本に配給されていないがあまり知られていない韓国映画を材料に、その郷愁というものについて考えます。



○第363回 8月16日(土) 「メキシコの女性たちー農村開発プロジェクトから彼女たちが学んだこと」

講師 鈴木紀(先端人類科学研究部准教授) 日本の生活改善運動をモデルにメキシコでおこなわれた農村開発プロジェクトについて紹介します。農家の女性たちは何を学び、何に気づいたのでしょうか。現地での聞き取り調査から考えます。



ミュージアム・ショップ

よくまなび よくあそべ 「あそびの特集」開催中。 7月29日(火)まで

車のハンドルにも、わたしたちの人生にもあそびは必要。そこで、7月のミュージアム・ショップではそんな「あそび」の特集を組みました。そして、世界の解説書も合わせてご紹介できるのも「みんなく」のミュージアム・ショップならではです。ソケットからの電気を使わずとも、皆さんの元気であそべる各地の民族の伝統的な小道具たち。それらを使ってのあそびをとおしてこの夏、民族のこともまなんでみませんか?皆様のご来館をお待ちしています。



あそびの小道具 将棋もネパールからパークチャル(¥3,150)、中国からはシャンチー(¥3,675)、韓国のゲーム、ユニノリ(¥2,100)、足で蹴ってあそぶタイのセバタクロー(¥1,575)とグアテマラのハッキーサク(¥399)など



あそびの解説書 『世界あやとり紀行』(¥1,575) 『世界の子供の遊び辞典』(¥2,415)など

国立民族学博物館 ミュージアム・ショップ TEL 06-6876-3112 FAX 06-6876-0875 (水曜定休) ウェブサイトもご覧ください。 オンラインショップ [World Wide Bazaar] http://www.senri-f.or.jp/shop/ E-mail shop@senri-f.or.jp

友の会

第362回 8月2日(土) 人類学者×人類学者③ カナダ先住民研究のパイオニア フランツ・ポアズ

講師 岸上伸啓(先端人類科学研究部教授) 「アメリカ人類学の父」とよばれるポアズは、1890年代~1930年代にかけてコロンビア大学を拠点として教育研究に従事しました。彼はイヌイトやクワクワカワクワの民族学的研究のパイオニアでした。彼の足跡をたどりながら研究を解説するとともに、わたし自身のカナダ先住民研究について紹介します。

第363回 9月6日(土) 人類学者×人類学者④ 友愛の人 マルセル・モース 講師 竹沢尚一郎(民族文化研究部教授)

場所 第5セミナー室  
時間 14:00~15:30(13:30開場)  
定員 96名(先着順、申し込み不要、当日会員証をご提示のうえご参加ください)

※席に余裕があれば会員以外の方もご聴講いただけます。

第84回東京講演会 7月6日(日) 嗜好品の人類史的意味

講師 松原正毅(民博名誉教授) 場所 たばこと塩の博物館1F視聴覚ホール 時間 14:00~16:00(13:45開場) 定員 80名(先着順、申し込み不要) 参加費 無料(当日に限り「友の会」会員証のご提示で無料入館できます) 共催 たばこと塩の博物館

親子ワークショップ 風呂敷をつかってみよう 8月3日(日)、19日(火) 13:30~14:45

参加費 500円(風呂敷お土産付き) 定員 30名(先着順、要申込)

羊毛をつむいでみよう 8月24日(日) 13:30~14:45 参加費 300円(材料費含む) 定員 20名(先着順、要申込)

場所 第3セミナー室 お申し込み・お問い合わせは下記の「友の会」係まで

国立民族学博物館友の会 TEL 06-6877-8893 FAX 06-6878-3716 受付(月~金) http://www.senri-f.or.jp/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp



# サトウキビ産業のたそがれ

丹羽 典生 (にわ のりお)

本館研究戦略センター

## フィジー人とインド人

フィジーのナンディ国際空港を出て、かつての調査地であったラウトカ方面のヤツメ村落に向かう。二〇〇七年一二月のことであった。二〇〇〇年の本格的な調査から何度目かの訪問となる。研究関心の変化に伴い古巣での滞在期間は減りつつあるが、フィジーに行くときには必ずかつて生活をともにした人びとの顔を拝みに行くことにしている。調査者の倫理とかいうおおげさなことではなく、むかしなじみに囲まれているのは過ごしやうしいし、老人の消息を尋ね、子どもの成長を見るのはかけがえのない経験だからだ。

行くたびに目を引く変化は何も人間だけに起きているわけではない。周りのサトウキビ畑は叢となり、点在していたインド人サトウキビ農家の家屋のいくつかは、フィジー人に占拠されている。

背景には、地主として国土の八三パーセント以上の土地を所有するフィジー人、サトウキビ生産者として借地するインド人という植民地時代に培われた民族間関係が終焉を迎えたことがある。クータに代表される政治問題は、両民族の關係に水を差した土地のリース延長を阻害し、先進国との経済協定に依存してきたフィジーのサトウキビ産業の構造自体も危機的状況にある。定年後の収入をサトウキビに頼っているインド人の一人はいった。「サトウキビ産業

の現状は悪いとは言いたくない。とにかくできることをやっておくだけだ」。

土地を借りていたのは何もインド人だけではない。遠く離島カンダウから、ヤツメ村落に移り住み、サトウキビ生産農家に特化したフィジー人もいる。四世代にわたってその村落にいたため子どもも多くはこの村落の方言しか解さない。そんな彼らもサトウキビ畑のリース切れに伴い、見知らぬ出身地へ帰郷しつつあるのだ。老人の一人は、新年会の席でこっそり話しかけてきた。「おれは今年で七〇だが、こんなに生活が厳しいなんて、これまでなかったことだ」。



サトウキビをトラックに搬入中のフィジー人

サトウキビ刈りの合間のインド人



## 時代の終わり

しかし、フィジー人ことに農村部で生活している彼らはまだましな状況だともいえる。自分の土地でサトウキビ栽培をしている人も多く、仮にリース契約が切れたとしても、寝起きする場所だけならばなんとか確保できる。さらに厳しい現実には直面しなければならぬのは、フィジーで土地をもつことがむずかしい他民族、ことにサトウキビとともに育ってきたインド人であろう。

年が明けてヤツメ村落を離れ、最近調査を始めたナウソリ近郊に向かった。ここでは、リースが切れ、また都会での職を求めて、ヴァヌアアレヴ島から押し寄せている大量のインド人を目にした。またまた知り合いになったインド人は語る。「このへんではフィジー人の畑の片隅に借地して大変だよ。借地料なんかフィジー人の言いなりだ」。

サトウキビ産業の再生に期待をかける人も多いが閉塞感はぬぐいきれない現状である。ひとつの産業の終焉は、ひとつの時代の終わりを象徴する。そこでは、これまでの関係が清算され、あらたな現実のなかでやりくりしていくよう人びとに迫る。ヤツメ村落を離れカンダウに向かったもう老年期に当たる知人の姿を思い返しつつ、彼のこれからの生活がよきものであることを願わずにはいられなかった。

時	論
新	論
理	想
論	

## 残存デンプン研究のススメ

渋谷 綾子 (しぶたにあやこ)

総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程

### 農耕が始まる前の食事

食へることは生きることである。現代の日本では非常にたくさんのお食糧があふれており、何を食へるか食へないか、自由に選ぶことが可能である。では、はるかむかしに生きていた人たち、たとえば旧石器時代や縄文時代の人びとはどんなものを食べていたのだろうか。彼らにも、現代のわたしたちのように食べ物を選べる自由がなかったのだろうか。

一般に、農耕が始まるまでは人びとは動物を狩り、魚介類を獲り、植物を採って、それらを食料にしていたと言われている。彼らがどんな動物や魚介類を食べていたのかについては、遺跡から見つかった骨や貝殻などから知ることができる。遺跡から出土した人骨の炭素・窒素アイソトープ値からは、陸上動物を多く食べていたのか、あるいは魚介類や海獣などの水産系資源が多かったのかなど、動物の種類を知ることができる。

ところが、人びとがどんな植物を食べていたのかを証明することは非常に難しい。クリやドングリなど堅い殻をもつ木の実や植物の種は土のなかでも残っており、それらは植物食の証拠になり得る。さらに、前述した人骨の炭素・窒素アイソトープ値からは、具体的な植物名まではわからないまでも、C3型植物(約9割の植物が該当)を多く食べていたか、C4型植物(トウモ

ロコシ・サトウキビなど)の方が多いかを知ることができる。このC3型やC4型というのは、植物を光合成の働きの違いによってわけたものである。

当然のことながら、こうした「目に見えるかたち」で残る植物ばかりが食べられるかたちではない。イモやワラビ、クズなどのように、腐りやすく土のなかでは残りにくいものについては、確かな証拠がないためにわかっていない。

### デンプン粒で証明

そこで、これらの植物が利用されていた証拠を「目に見えるかたち」にするため、考古遺物の表面や遺跡土壌に残るデンプン粒からそれらの証拠を見つけ出すのが残存デンプン研究であり、これはわたしの博士論文研究の主題である。

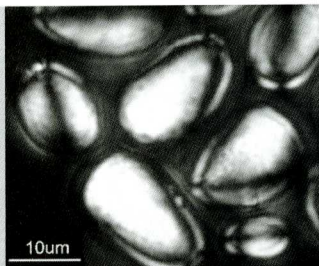
植物のデンプンは高等植物の種子や茎(幹)、葉、根などの主要部分に蓄積されており、植物のエネルギー源として機能している。デンプンは非常に安定した化学構造をもっており、どのような環境でも残る。こうした特質を活かし、古植生の変化や食物の歴史を探究するのが残存デンプン研究である。

この研究は世界的に見ても比較的新しい分野であり、日本で研究に従事している者はわたしを含めて一〇人もいない。そのため、日本では研究事例の蓄積が第一に求

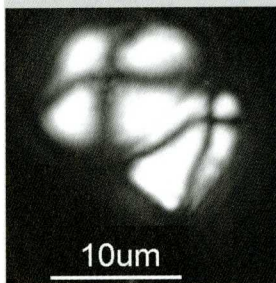
められ、各分野の研究者たちが納得できるような実証性の確立が要求されている。多くの考古学者たちがこの研究の進展を望んでいることは確かだが、実際に始める研究者はほとんどおらず、多くの問題を解決するまでの道のりはとても遠い。

ともかくにも、日本における研究事例を蓄積し、各方面へ研究成果の報告をおこなうことがわたしの現在のつとめである。多くの人たちに研究への関心をもってもらい、研究の仲間が増えてくれることを切に願っている。

ジネンジョのデンプン(光顕400倍)  
ジネンジョ(ヤマノイモ)のデンプンは半楕円形をしており、デンプンのなかでも非常に特徴的なかたちである



旧石器時代の石器から検出したデンプン(光顕400倍)  
ジネンジョのデンプンのかたちとよく似ており、旧石器時代に根茎・球根類が利用された証拠となる可能性がある





「百周年記念ミス・ブラジル日本」  
大塚橋ホールにて



ミスコンテストで  
優勝したアドリアーナ



デザイナーLinda K.による  
ファッションショー



両親とコンテストの優勝でもらった車の前で

## 外国人 と生きる

「ハーフ」であることに誇りをもつ、  
100年に一人の「ミス・ブラジル日本」

アンジェロ・イシ

武蔵大学准教授

### 望まれる東洋系ハーフ

二〇〇八年は日本からブラジルに最初の移民船が渡ってちょうど一〇〇年になる。この移民一〇〇周年を記念して、出港地の神戸と横浜では、さまざまな記念イベントがおこなわれてきた。そのひとつが、横浜の大塚橋ホールで五月三日に開催された「百周年記念ミス・ブラジル日本」である。このコンテストには日本全国から約七〇人が応募し、優勝者への副賞として新車一台が贈られた。そして、そのミスに輝いたのは、日系三世のアドリアーナ・ラヴィーネ・イナガキである。

アドリアーナはブラジルの最南部、リオグランデドスール州出身。同州はもっとも多くの世界的トップモデルを輩出する「美人の地」として知られ、ファッション界の女王とさえ言われるジゼル出身地としても有名である。当地の若い女性たちが一度はモデルを夢見るのは当然のことでもある。じつはアドリアーナより一歳年上の姉、イアーナも、早くからモデルとしてのキャリアを実現しようと、積極的にオーディションを受けていたほどだ。当時ちょっと太っていたので、自分もモデルになれるとは思えなかったというアドリアーナにとってもそれは大きな夢であった。

アドリアーナの父親はブラジルでは電話会社の事務所に勤務していた。しかし家計事情は思わしくなく、日本へのデカセギを決心した。当初両親だけが来日し

て、娘たちはブラジルで勉強を続けさせた計画だったが、どうしても親に泣きついた二人は結局、ともに来日することになった。二〇〇五年のことであった。

来日後、姉妹は工場でも少し働いたが、日本にもブラジル人学校があることを知り、入学した。学校のレベルに不満で二度も転校したが、二〇〇七年、無事にブラジル人の高校を卒業した。公文書の塾にも通い、日本語の勉強にも力をいれた。

アドリアーナは父親が日系人で、いわゆる「メスチーサ」（混血児）である。日本では、その外見のため、コンビニや電車のなかで幾度か冷たい視線を浴びた。しかし、笑顔が消えなかったのは、日本人と違う顔をしていることが、一方で肯定的に評価される社会でもあったからだ。彼女いわく、自分は背が高くないのでブラジルではあまり目立たなかったが、ここでは「東洋系のハーフ」であることがモデル業界でも望まれる存在であった。

最初に転機を迎えたのは姉のイアーナだった。彼女は二〇〇六年、在日ブラジル人の二大ミスコンテストのひとつである「ミス・ニッケイ」でいきなり優勝し、モデルとして働き始めた。アドリアーナはバルバラ・ナカツガサというプロモーターが手がけた「ミス・ブラジル日本」に応募し、予選を通過した時点でさっそくある事務所から声がかかり、モデルとしてデビューできた。そして今回のコンテストでの優勝は、彼女に飛躍の機会をもたらすだろう。

### モデルは一握り

それにしても、何故、三〇万人を超える在日ブラジル人社会において、これほどまでに美人コンテストが盛り上がるのだろうか。それは、何よりもまず、ブラジル出身の日系人女性たちにとっては、モデル業こそが、日本人との差異がプラス評価になる数少ない業界であるからだ。世界でも有数のセレブリティになったジゼルの成功物語が、多くの少女やその保護者たちを刺激していることはいまでもない。しかし、第二のジゼルを目指す人がこれだけ多いのは、それだけ日本での進学の可能性に寄せる期待が低いということの裏返しだとも言える。

わたしはブラジル出身者に向けた講演や執筆活動のなかで、「モデルになれるのはごく一握りの人だから、きちんと勉強もしましょう」との主張を重ねてきた。アドリアーナの話を聞いて感心したのは、彼女がモデルとして順調な滑り出しを遂げているにもかかわらず、勉強に対する意欲を失っていないことである。彼女は日本語をもっと勉強して、日本の大学でエッセイリズムを勉強するという選択肢も考えたことがある。現時点では、ブラジルを拠点とする通信制の大学で経営学か教育学を勉強することになりそうだが、遠隔教育を実施する複数のブラジルの大学が日本に進出しており、在日ブラジル人のあいだで大きな注目を集めている。

### カラオケからコンテストへ

ミスコンテスト全盛期を理解するためのもうひとつのキーワードは、日本におけるブラジル系エスニックビジネスの成熟である。ミスコンテストでは毎回、新車などの豪華賞品を提供する数十のスポンサーの企業名が延々とあげられる。それだけ力のあるスポンサーが存在しなければ、このような大規模なイベントは実現できるはずがない。じつは、一九九〇年代をとおり、同じく一等賞に新車を提供し話題を集めてきたのが、在日ブラジル人のいわゆる「のど自慢」、カラオケ大会であった。移民の第一世代が主役であったカラオケに代わって、移民の第二世代が主役であるミスコンテストがコミュニティでもっとも注目されるイベントに発展したことは、移民社会の変貌を象徴しているともいえる。

アドリアーナの晴れ舞台となったファッションショーは、日本に根を下ろしたブラジル人デザイナー、Linda K. のデザインによるものであった。モデルたちはそこで美貌を披露すると同時に、「あなたは移民一〇〇周年についてどう思いますか？」という質問で知性が試された。アドリアーナの答えは次のようなものであった。「日本からブラジルに渡った祖父母の頑張りこそが、今のわたしにインスピレーションを与えてくれている」。

優勝を手にした五月三日は、奇しくも彼女の十七歳の誕生日でもあった。

# 歳時 世相篇

## ④ 【雨安居】

### ラオスの若者が出家する理由

平井 京之介（ひらい きよすけ）

本館民族文化研究部

ラオスなどの東南アジア大陸部では、六月から一〇月が雨季である。海から大陸に向かって湿潤な南西の季節風が吹き、毎日雨を降らせる。

日本で梅雨が好きな人は少ないだろうが、ラオスの雨季はけっこう人気がある。多くの人があげる理由はふたつ。まず、食料が豊富なこと。農村で暮らしていると、雨季にはいろいろな味が楽しめる。山でタケノコ、キノコ、野菜が採れ、川や沼でサカナやエビ、カエルが獲れる。腕さえあれば、またイネの生育にも雨季の降り続く雨は不可欠だ。この地域の子食はコメなのだから。

かが涼しいこと。ラオスでは、三月終わりから五月にかけてがもつとも暑い。昼は四〇度近く、夜でも三〇度前後ある。一日中、鼻の奥に何かがつまっている感じで、息苦しい。頭はまったく動かない。扇風機は熱風をかき回すだけで、夜眠れない。一気にクールダウンしてくれる雨が待ち遠しい。

雨季のあいだ、上座部仏教の僧侶は僧院にこもって修行する。本来、出家者とは諸国を遍歴して修行する者。托鉢して布施を受け、ボロ切れをまとい、樹下で眠り、簡素な生活を送る。しかし雨季の遊行は不便である。疫病にかかりやすい。布施を受けるのが困難。草木の若芽や虫

を踏んでしまう。あるいは、百姓が植えたイネを踏んでしまう。ブツダは修行僧に雨季の定住を勧めた、と『大パリニツバーナ経』にある。これが雨安居（あまじ）（パンサー）だ。

#### 一生に一度は出家せよ

現在、雨安居とは、暦のうえで雨季にあたるラオスの陰暦八月一六日から十一月五日（二〇〇八年は太陽暦で七月一八日から一〇月一四日）のことを指す。僧侶が三カ月間集団生活しながら修行に専念する大切な時期だ。雨安居を何回経験したかが、僧侶として

の経歴年数とされ、これによって教団内の地位が決められる。ちなみに明確な雨季のない日本でも、禅宗には雨安居の習慣があるそうだ。

上座部仏教を信仰する社会には、男子たるもの一生に一度、家を出て、解脱を求めて修行せよ、という教えがある。出家経験が社会的な信頼をえることにつながる。これがないと未熟者だ。女性にもてたければ、出家しろ。責任感や道徳心、礼儀作法などが身につく。かつて僧院は唯一の教育機関であり、読み書きをはじめ、知識を学ぶ場でもあった。

出家は本人の信心しだいでもいつしてもよい。飽きたらいつでも還俗できる。

しかしもつとも一般的な出家期間は三カ月、時期はこの雨安居である。結果、毎年雨安居になると、ラオスの僧院ではどこも人口が二、三倍にふくらんでいる。

#### 修行で何を学ぶのか

それでは僧院にこもって何をするか。特別な修行や断食などするわけではない。ふつうに暮らすだけ。三時半に起きて朝の読経をし、夜が明けたら近くの村まで托鉢に行く。日に一度の食事を済ませ、掃除や菜園の手入れ、僧坊の建設などの雑役をする。水浴びの後、午後四時から夕方の読経に出る。これが一日のおもな日課だ。あとは空いた時間を利用して、経を覚えたり瞑想したり。

月に一回、僧侶全員が参加して、布薩（ふさつ）（ウポーサタ）儀礼が開かれる。シーマとよばれる神聖な場所をもつ本堂に集まり、過去一カ月分の自分の行動を反省し、犯した罪を懺悔する。それから、あらためて僧侶の守るべきパーティモツカ（二七条の戒律）の全文が読み上げられるのを聴き、各自誓いをあらたにする。

こうした修行を経て何を学ぶか。仏教の教え。人生について。自分について。答え方はいろいろあるが、具体的に説

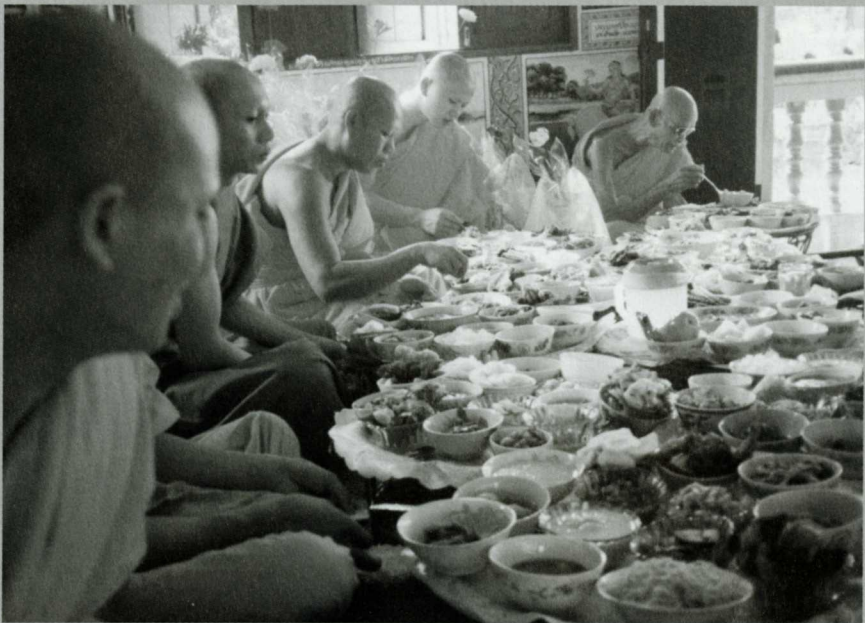
明するのはむずかしい。仏教の教えとは、テキストを覚えれば済むようなものではない。各人が瞑想するなかで自ら悟るほかないのである。

わたしが学んだことを少しだけ紹介しよう。まず、集中力の大切さ。一所懸命食べたり、歩いたりすることがいかに大事か。これが生きるということだ。もうひとつは煩惱について。過去の苦しかった経験をひとつひとつ取り上げ、経典や説法を導き手としながら、何が原因かをとことんまで考え抜く。すると、おほるげながらつかめてくる。苦しみの原因はいつも自分にあるということが。

#### 出家の新しい意味

現在、ラオスの農村では、雨安居にあわせて出家する若者がぐっと減ってしまった。教育機関としての機能が学校に取って代わられたためだ。学歴が僧侶より高く評価されるようになった。元僧より大卒の方が女性にもてる。

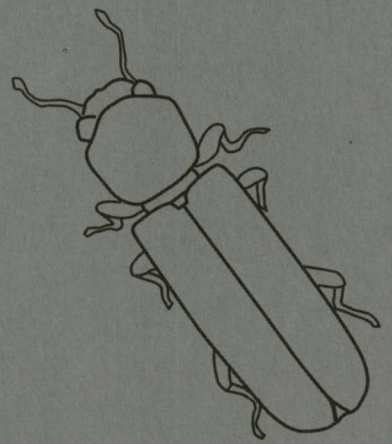
皮肉なことに、都市では若い出家者が増えている。地方の貧困地域から多数の少年が都市にやって来て、僧坊に起居しながら高校や大学へ通うのである。出家が、ただで高等教育を受ける手段になっているのだ。



入雨安居の儀礼に参加する僧侶

# 生きもの 博物誌

【ヒラタキクイムシ】



## 博物館の いたずら虫たち①

園田 直子  
(そのだ なおこ)

本館文化資源研究センター

### 生物界で最大のグループ

コウチュウ目の体は角質化した表皮で覆われており、昆虫のなかで唯一、手で握りしめてもつぶれない。コウチュウ目の種類は全動植物の四分の一を占めるといわれ、生物界で最大のグループである。このうちヒラタキクイムシ科には木像などに害をおよぼす文化財害虫の種が多数含まれており、その代表的なものにヒラタキクイムシがある。ヒラタキクイムシの幼虫は、木材に含まれるでんぷんを栄養分とする。幼虫は木材の内部を食べながら成長し、羽化するときには孔をあけて脱出する。木材の表面に直径二ミリメートル程度の脱出孔が多数あらわれ、その下に虫粉

(糞とかじり屑)が落ちていているのを見てはじめて、被害に気づくことが多い。

博物館資料のなかでも虫害にあいやすい材質が多く使われているのが民族資料である。そのため民博では、防虫対策にとくに注意を払ってきているが、二〇〇一年夏、南アジア展示場のインドの木造漁船(写真1)にヒラタキクイムシの被害が発生してしまった。この漁船はインド、オリッサ州ブリーリー市で使用されていたもので、直径三〇センチメートルほどの丸太を組み合わせてできており、長さは八メートル近くある。この大きさを考えると、展示場から簡単に動かすことはできない。漁船を保存処理するにあたっては、安全優先の考えから、化学薬剤を用いる手法は避けることにした。

### 人と資料にやさしい虫害対策

国内の博物館では、薬剤を用いない殺虫処理として二酸化炭素処理がすでに実用段階に入っていたが、処理日数が二週間ほど必要となるので、土曜日や日曜日にかかってしまう。そこで、当時の森田恒之教授(現・名誉教授)の共同研究会で基礎実験をおこなった結果、準備期間も含めて三日以内に処理が完了する高温処理を採用することにした。

展示場で安全かつ効率的に高温処理がおこなえるようにと考案したのが、漁船を防湿プラスチックシートで包み込み、断熱箱のなかで加温するという方法(写真2、3、4)である。漁船をシートで密封したのは、木が乾燥し過ぎて変形するのを防ぐためである。漁船を包み込んだ後、シート内を脱気し僅かの空気しか残していないので、温度が上がっても木から水分が失われることはほとんどない。あたためられた空気は、熱発生装置からパイプをとおして断熱箱に送られ、断熱箱内の漁船をあたためた後、別系統のパイプで熱発生装置に戻すため、展示場の温度と湿度には影響を与えない。漁船をかたちづくっている丸太の芯まで効果的に殺虫できる温度に達しているかは、同じ直径の実験用丸太を漁船のなかに配置し、その中央部分の温度を計測することで確認した(写真5)。二〇〇二年と二〇〇三年、展示場で漁船の高温処理をおこなった際には、必要最小部分のみ通行止めとしながらも、すべて公開とし、観覧者の方々に博物館の舞台裏を見ていただいた。この処理は、二〇〇八年三月まで開催されていた企画展「世界を集める―研究者の選んだみんぱくコレクション」でも紹介したので、みなさまの記憶に新しい。

ヒラタキクイムシは熱帯・温帯に広く分布し、南方からの移入種とされている。北日本の屋外では越冬で

きなかったのが、暖房の普及によって、全国的に被害が発生するようになったという。人間の生活が快適に

なるのは良いが、思わぬところでマイナスの副産物が出てくるものである。



(写真1) 南アジア展示場の木造漁船(H163254)



(写真2) 漁船をクレーンでつりあげ、断熱箱の床の部分を組み立てる



(写真3) 防湿プラスチックシートで漁船を密封した後、シート内を脱気する



(写真4) 南アジア展示場での漁船の高温処理(2003年3月)。左手は熱発生装置、右手の断熱箱のなかに防湿プラスチックシートで密封された漁船が入っている



(写真5) 実験用丸太を使い、木材芯部の温度推移を測定する

コウチュウ目 (Stephens) ヒラタキクイムシ科 (Lyctidae)  
ヒラタキクイムシ (学名: *Lyctus brunneus* (Stephens))

成虫は体長2.2~7.0mm、体は赤褐色で、やや扁平な細長いかたちをしている。幼虫の体長は4~5mmで、腹方へ曲がった勾玉形をしている。卵は長さ1mm程度で長円筒形である。日本では古くは本州中部以西であったが、現在は北海道まで国内全土に分布。成虫は春から夏に出現し、広葉樹の辺材の導管や割れ目に産卵する。幼虫は食害しながら成長し、被害材から直径1~2mmの虫孔を穿って脱出する。そのとき、虫粉が小さな山をなすので、英名 powder-post beetle と名づけられている。



提供=イカリ消毒株式会社



## 本音の在りか

鈴木 紀 (すずき もとい)

本館先端人類科学研究部

### 集まってきた女性たち

二〇〇六年八月二日、メキシコはチアパス州のある農村を初めて訪問した。日本の国際協力機構が実施した農村開発プロジェクト(PAPROSOC)を、現地の女性たちがどのように受け止めているか聞き取り調査するため。リーダーのグアダルルーペさんを訪ねると、プロジェクトに参加した女性たちが村の公民館に集まってくるという。それはありがたいが、手回しが良すぎる。わたしは個別インタビューを望んでいたのだ。まずリーダーと世間話から始めて、少しずつプロジェクトの話聞き、他の仲間を紹介してもらって、そこで

もおしゃべり：と、段取りを踏んで聞き取りを進めるはずだった。かといって集まった人びとを解散させるわけにもいかず、わたしはほどなく一八人の主婦の前で、冷や汗をかきながら自己紹介を始めた。アドリブで芸を披露することになった漫才師の気分でもいったらよいだろうか。何故こんなことになってしまったのか。事前に国際協力機構に便宜供与をお願いし、この村への訪問を伝えていた。それに対し「万事アレンジしておきますよ」というメールをもらっていた。おそらくプロジェクトのスタッフがグアダルルーペさん自身が「日本人が調査に来るから皆を集めよう」と発想したのだろう。

### 開発援助のツール

じつはこうした集会は開発援助活動ではめずらしいことではない。途上国の農村開発を始めるには、農民の暮らしているところをよく調べるのが大切だ。そのため、村を開発する一軒一軒訪問する方法もあるが、皆に集まってもらって一度に尋ねる方が効率的と考えられている。また重要な情報を聞き出すときに、村長など一部の村人から意見を聞くよりも、なるべく多くの村人と相談した方が、あとあと皆が協力的になると期待されている。

わたしがかわかることになったこの日の集会は、援助の専門用語でフォーカス・グループ・ディスカッションという。村人のなかからプロジェクトに参加した経験をもつ者に集まってもらい、その人たちのあいだで共通に理解されている考えを探る調査ツールだ。終了した援助プロジェクトを受益者の視点で評価するときによく用いられる。研究者というよりもプロジェクト関係者としてわたしを認識した村人にとって、この集会の開催はきわめて自然な流れだったのだろう。

### 人びとの本音

村の女性たちはこの種の集会に慣れてきた。出身地、学歴、子どもの数など客観的

な情報については、はきはきと答えてくれた。しかも他の人の前なので、嘘をつくこともない。なるほど個別訪問よりは時間を節約できるとわたしも納得した。しかしひとつ主観的な問題はどうかだろうか。わたしはプロジェクトの印象を聞いてみた。

「お金をもらってもすくなくなくなるが、プロジェクトで学んだ技術は残る」という意見。グループで野菜づくりを学んだ女性の模範解答だ。このプロジェクトの公式の評価報告書にも同様の意見が書かれていた。それを確認できたことはわたしにとって収穫だが、もつと違う意見もあるはずだ。そこでグループ活動の難しさについて尋ねてみた。

「皆の合意をとりつけること」と一人の女性。それではそれをどう解決しましたか」とつっこむわたし。しばしの沈黙。顔を見あわせる女性たち。やがて別の一人が「皆で動く仕事は早くすむ」というもうひとつの模範解答。その発言でわたしの質問はそらされてしまった。

だと気付いた。しかし同時にグアダルルーペさんが集会でも個人面接でもこのことをわたしに話してくれなかったことが気になった。

この事例から、集会の模範解答を建て前、技師への相談を本音とみなすことはたやすい。そう考えると建て前しか聞けないフォーカス・グループ・ディスカッションは調査方法としては信頼がおけず、それに依拠するプロジェクト評価にも疑問がわいてくる。しかしわたしは両方とも彼女たちの本音なのだと思う。この日の集会は、問題を訴えて解決策をえる場というよりも、援助供与国の日本からはるばるやってきたわたしをもてなす場だったのだ。村の女性たちは、自分たちがどれだけががんばったかを伝えることによりわたしを安心させ、あわよくばさらなる援助を引き出したいと願ったのだらう。だからフォーカス・グループ・ディスカッションは決して無駄ではない。援助の受益者たちが、援助の提供者に本音を伝える有効な手段なのだから。

ただしフォーカス・グループ・ディスカッションを受益者の本音を聞く唯一の手段とみなすことは間違いだ。人びとは他の方法でも本音をいう。そういう本音を聞き渡らさないためには、効率が悪くともたかさんの時間をフィールドですくすくすることが不可欠だ。文化人類学者が開発を研究することの意義はこのあたりにあるのだろう。



農村開発プロジェクトがおこなわれたメキシコの農村

フォーカス・グループ・ディスカッションを試みる筆者



プロジェクトで学んだ野菜づくり (提供=PAPROSOC)

プロジェクトのワークショップ (提供=PAPROSOC)



ワークショップの成果を発表する女性たち (提供=PAPROSOC)



# 研究者と話そう

■時間：14:30～15:30(予定)

■参加費：無料(ただし、観覧料が必要)

国立民族学博物館(みんぱく)の研究者が来館された皆様の前に登場します!「研究について」「調査している地域(国)の最新情報」「展示資料について」などなど、話題や内容は千差万別!どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしております。



取材の警護をしてくれた  
フィリピン国家警察の兵士たち

・実施日・話者・話題・場所 ※都合により、予定を変更することがあります。

7月6日(日)

**寺田 吉孝** (民族文化研究部准教授)  
フィリピン・ゴング音楽の現状  
於:常設展示場入口

7月13日(日)

**野林 厚志** (文化資源研究センター准教授)  
博物館と台湾原住民  
於:中国地域の文化展示 他

7月20日(日)

**齋藤 晃** (先端人類科学研究部准教授)  
ラテンアメリカを踏査する  
一写真で辿る黎明期の考古学・民族学調査  
於:企画展「ラテンアメリカを踏査する」

7月27日(日)

**菊澤 律子** (先端人類科学研究部准教授)  
数を数える・お金を数える  
於:企画展「いろんな『おかね』で世界がみえる」

## 編集後記

『月刊みんぱく』の「外国人として生きる」を担当して、もう2年経った。このあいだ、さまざまな分野で活動する外国出身者の生き方を個人名や写真とともに紹介してきた。本来この企画は、日本で生活する外国人(移民)の元気で積極的な生き方を紹介することにあった。街角や商店では毎日のように目にし、マスコミでもしばしば取り上げられるようになった外国人だが、そこで描かれる苦勞、差別、違法など問題をかかえた対象としての暗く受動的なイメージはぬぐいがたい。たしかに日本での生活には多くの困難をとまうのが普通だが、彼らがそれぞれ個人として目標や生き甲斐をもち、人生を楽しもうとする姿はみおとされがちであった。

そして今年の春からは、日本在住の移民、外国人の二世を取り上げている。彼らのなかには、社会への一員として積極的に働きかけることで、一世が経験した苦勞や限界を克服し、場合によってはそれらを自分の可能性に転化しようとするものも少なくない。彼らの姿が、日本人の外国人イメージを再考するきっかけになり、さらに日本人や外国人、双方の生きかたに参考になればと思う。今後もどのような若者が登場するか楽しみである。(庄司 博史)



次号予告/みんぱくインタビュー  
人文地理学者として  
2つのフィールド

2008年7月号 第32巻第7号通巻第370号  
2008年7月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館  
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1  
電話06-6876-2151

発行人 西尾哲夫

編集委員 久保正敏(編集長) 佐々木史郎  
庄司博史 中牧弘允 三尾 稔  
山中由里子

協力 財団法人 千里文化財団

制作 株式会社博報堂

製版・印刷 アサヒ精版印刷株式会社

●本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画課まで  
●本誌掲載記事の無断転載を禁じます

### 交通案内

■大阪・千里万博記念公園内

- 大阪モノレールで「公園東口駅」・「万博記念公園駅」下車徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車徒歩約15分(茨木方面から1時間1本程度、日本庭園前駐車場乗り入れのバスがあります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください)。
- 自家用車の場合は、万博記念公園「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

